

「女ことば／男ことば」規範をめぐる

佐竹 久仁子

1 はじめに

女の、あるいは、男のことばづかい・話しかたはこういうものだ、こうあるべきだという規範意識はわたしたちの社会に広く共有されている。この「女ことば／男ことば」規範はジェンダー規範の一種である。日本の「女ことば／男ことば」規範の強さは、ごくふつうに「最近では男ことばをつかう女の子が増えてなぜかわしい」「男のくせに女ことばをつかっている」といったことばが聞かれることから明らかで、女と男のことばはちがって当然と意識されている。これは日本のジェンダー規範が非常にきびしいことと対応する。また一方、「女ことば／男ことば」規範がジェンダー規範を維持するのに大きな役割を果たしている面もあるといえる。

ここでは、まず、大学生を対象としたアンケート調査^(註1)から、その「女ことば／男ことば」規範意識について報告する。つぎに、この規範意識を生み出し支えている要因について、言語にかかわる側面をとりあげて考えてみたい。関西の大学生のふだんの話しことばを観察すると、きわだった性差を示す言語形式の種類は非常に少ない。自称詞のちがいと、男の文末形式「ぞ（終助詞）」が目立つ程度である。しかし、それほど性差のない形式をつかいつつながら、「女ことば／男ことば」規範はかなり強く意識されているのである。それはなにによるのだろうか。

2 「女ことば／男ことば」についてのイメージ

2.1 「イメージ評価語」の数

大学生は「女ことば／男ことば」をどのようなものとしてみているのだろうか。女子学生72名・男子学生89名の計161名に、「女ことば」「男ことば」それぞれについてどういうイメージをもっているかをたずね、自由に記入

してもらった。そこでつかわれた「イメージをあらわす語（語句）」（以下「イメージ評価語」）の数をまとめると〔表 1〕のようになる。

〔表 1〕イメージ評価語の数（数字は語数）

	女子学生（72名）		男子学生（89名）		全体（161名）	
	延べ	異なり	延べ	異なり	延べ	異なり
女ことば	207	42	103	27	310	57
男ことば	178	51	98	28	276	63
計	385	93	201	55	586	120

女子学生と男子学生とでは、延べ語数、異なり語数ともかなりの差がある。女子学生は、平均すると 1 人あたり 5.3 語のイメージ評価語をつかって「女ことば／男ことば」について述べているのにたいし、男子学生は 2.3 語しかつかっていない。異なり語数も、女子学生 93 語に比べ、男子学生は 55 語と少ない。男子学生はみな似たようなことばで簡単にイメージを記しているのだが（たとえば「女ことばはやさしく、男ことばは乱暴。」といったように）、女子学生の記述はかなり詳しく内容の個人差も大きかった。ことばにたいする興味や関心の持ちかたに差があるのかもしれないが、自分の性とことばづかいとの関係について自覚的かどうかのちがいもあると考えられる。「女ことば／男ことば」規範によってより強く束縛されるのは女の言語行動であることから、女子学生のほうが「女ことば／男ことば」について自分にかかわりのある問題として考える機会が多いのではないだろうか。これは、あとでみるイメージ評価語の差からもうかがえる。

2.2 イメージの内容

つぎにイメージの内容だが、「女ことば」について 57 種類、「男ことば」について 63 種類の語がイメージ評価語としてつかわれていた。そのうち女子学生グループ（72 名）・男子学生グループ（89 名）に共通して用いられていた語は以下のとおりである。

《「女ことば」について》（12 語）

やさしい (79)・ていねい (41)・やわらかい (35)・上品 (29)・きれい (14)・女らしい (10)・おだやか (9)・おしとやか (6)・日本 (文化) の伝統 (5)・かわいい (4)・あこがれる (3)・あたたかい (3)

《「男ことば」について》(17語)

乱暴 (59)・荒っぽい (14)・きたない (14)・ぞんざい (14)・強い (12)
・下品 (11)・粗雑 (11)・荒々しい (10)・荒い (10)・男らしい (8)
・率直 (5)・えらそう (4)・がらが悪い (4)・はきはきしている (4)
・こわい (3)・かたい (2)・粗野 (2)

() 内の数字は回答者数

予想しうることではあるが、やはり「女ことば／男ことば」規範にもとづいた「やさしくていねいで上品な女ことば」と「荒っぽく乱暴で下品な男ことば」という対比的なイメージをいだいている傾向がわかる。これは、「女らしさ／男らしさ」というジェンダーイメージのステレオタイプのある側面に合致する。それぞれのステレオタイプは、プラス評価とマイナス評価の両側面をあわせもつ。たとえば、「女らしさ」の特徴とされる「やさしさ」は「弱さ」でもあり、「男らしさ」の特徴とされる「強さ」は「乱暴さ」でもある。この点からみると、「女ことば」は「女らしさ」のプラス評価の側面とより多く結びつき、「男ことば」は「男らしさ」のマイナス評価の側面とより多く結びついているといえる。

回答の語をもう少しくわしくみてみよう。イメージ評価語を、肯定的評価語・否定的評価語・中立的評価語に3分類した。

【肯定的評価語】

《「女ことば」について》(25語)

やさしい・やわらかい・おだやか・おっとりとした(f)・あたたかい／
ていねい・謙虚(f)／上品・きれい・美しい(f)・清らか(m)・おしと
やか・しつけがいい(m)／女らしい・女っぽい(m)／かわいらしい(m)
・かわいい／あこがれる・魅力的(m)・つかってほしい(m)・そそられ

る(m)／日本(文化)の伝統・女性のたしなみ(m)・親近感を高める(f)
・つかうととくをする(f)

《「男ことば」について》(28語)

かざらない(f)・率直・うそがない(f)・信頼できそう(f)・さばさば
している(f)・はっきりしている(m)・さわやか(f)／威厳がある(f)
・上位(f)・立派にみえる(f)・かっこいい(f)／強い・強そう(f)・
力強い(f)・パワフル(m)・迫力がある(m)・力がある(f)・勢いがある
(f)・たくましい(f)・頼もしい(f)・はきはきしている・活発(m)
／男らしい・男っぽい(m)／友情がある(f)・仲間意識を強める(f)・
仲良し(f)・親しみがもてる(f)

【否定的評価語】

《「女ことば」について》(22語)

もってまわった感じ(f)／あまったれている(f)・ぶりっこ(f)／弱い
(f)・か弱い(m)・弱々しい(m)・迫力がない(f)・軽い(f)・なよな
よしている(f)・下位(f)／陰険(f)・裏がありそう(f)・わざとらし
い(f)・うそっぽい(f)・いやみ(f)・だまされる(m)／きらい(f)・
つかいたくない(f)・うっとうしい(f)・ださい(f)・時代錯誤(f)・
舌がへんになる(f)

《「男ことば」について》(28語)

乱暴・暴力的(m)・ぞんざい・がさつ(f)・粗雑・雑(f)・武骨(f)・
荒い・荒々しい・荒っぽい・粗野・こわい／きつい(f)・どぎつい(f)
・とげとげしい(m)・とがった(m)・つけんどん(m)・ぶっきらぼう
(f)／命令口調(f)・えらそう・傲慢(m)・威圧的(f)／下品・上品で
ない(f)・きたない・きれいでない(f)・がらが悪い・悪い(f)

【中立的評価語】

《「女ことば」について》(10語)

角がない(m)・丸みがある(f)・なめらか(m)／遠回し(f)・婉曲的
(f)／おとなしい(m)／古風(f)・お嬢さま(f)・おちょぼ口(m)・抑
揚がある(f)

《「男ことば」について》(7語)

四角い(f)・かたい／断定的(f)・単刀直入(f)・ストレート(f)・直接的(f)／闊い(m)

(f)は女子学生のみ、(m)は男子学生をみの回答に用いられた語

〔表2〕は、肯定的・否定的・中立的評価語がどのくらいつかわれているかを、女子学生グループと男子学生グループで比較したものである。「女ことば」のイメージを肯定的評価語で、「男ことば」のイメージを否定的評価語でとらえる傾向は、男子学生グループのほうにより強い。女子学生グループでは、男子学生グループにくらべて「女ことば」に否定的評価語が、「男ことば」に肯定的評価語がかなりあらわれる。女子学生は男子学生ほど「女ことば＝プラスイメージ」「男ことば＝マイナスイメージ」ではとらえていないということだろう。

〔表2〕「肯定的」「否定的」「中立的」評価語の数(数字は語数(%))

		女子学生	男子学生	全体
女 こ と ば	肯定的評価語	167 (80.7)	92 (89.3)	259 (83.5)
	否定的評価語	30 (14.5)	6 (5.8)	36 (11.6)
	中立的評価語	10 (4.8)	5 (4.9)	15 (4.8)
	計	207	103	310
男 こ と ば	肯定的評価語	58 (32.6)	14 (14.3)	72 (26.1)
	否定的評価語	110 (61.8)	82 (83.7)	192 (69.6)
	中立的評価語	10 (5.6)	2 (2.0)	12 (4.3)
	計	178	98	276

女子学生グループと男子学生グループとではつかわれる評価語の内容にもちがいがある。たとえば、「女ことば」イメージの肯定的評価語として「かわいらしい・かわいい」を男子学生は9名がつかっているが、女子学生では1名のみである。「陰険・裏がありそう・うそっぽい・きらい・うとうしい」など否定的評価語のほとんどは女子学生によってつかわれており、男子学生がつかっているのは「か弱い・弱々しい」5名、「だまされる」1名のみである。また、「男ことば」イメージの肯定的評価語で男子学生がつかっ

ているのはもっぱら「強さ」にかかわる語であるが、女子学生はそれ以外にも「かっこいい」「さわやか」や「友情がある・仲間意識を強める」などより積極的な評価語を用いている。

回答の傾向から、女子学生には「女ことば／男ことば」規範にたいする疑問や反発を感じている者がいることがうかがえる。

2.3 「女ことば／男ことば」規範がつくりだすイメージ

いつでもどこでもまったく同じ話しかたをする、という人はまずいない。女も男も場面や聞き手などの条件によって話しかたを変え、時にはていねいであらたまった、また時にはぞんざいでくだけた話しかたをしている。したがって、女のことばづかい・話しかたを「女ことば」、男のそれを「男ことば」とするならば、このような現実のさまざまな話しかたをもとに「女ことば」「男ことば」それぞれに統一的なイメージをえがきだすことはむずかしいはずである。しかし、さきの回答からわかるとおり、大学生の「女ことば／男ことば」イメージは明確なものである。「女ことばと男ことばのちがいがわからないので答えられない」とか「イメージがうかばない」という回答はなかった。つまり、このイメージは、現実の女と男の話しかたにもとづくというより、女はていねいで上品な話しかたをするべきだ、男は乱暴でぞんざいな話しかたが許されるといった「女ことば／男ことば」規範によっていだかされているイメージであると考えられる。学生たちがそろって似たようなイメージを迷わず答えているということは、それだけ「女ことば／男ことば」規範が広く共有され深く内面化されているということだろう。

「女ことば／男ことば」規範の意味するところは、ことばづかい・話しかたの評価基準が話し手の性によって異なるということである。たとえば、同じぞんざいな話しかた、断定的な話しかたが男では「ざっくばらん・率直・力強い」と評価されるのに、女のばあい「乱暴・きつい」として非難されるということがある。男には「ぞんざい～ていねい」「断定的～婉曲的」までさまざまなレベルを自由に選択することを許すが、「ぞんざい・断定的」な

話しかたは「男ことば」として女の自由な使用を規制するのである。そして、女にはやさしくていねいな話しかたがわりあてられるが、それは、やさしさや気配りが女本来の性質だとされるからである。女と男の性質や役割はちがっていて当然だとするジェンダー意識が「女ことば／男ことば」規範を支えているのである。

「女ことば／男ことば」規範がこのように男の言語使用には自由を保障し、女の言語使用を規制するものであることを考えれば、この規範に無頓着である男子学生と、抵抗感を示す女子学生との差が生まれるのも当然だろう。

3 ことばづかいのしつけ

「女ことば／男ことば」の規範意識をつくる要因として、ことばづかいについてのしつけを無視することはできない。女か男かでことばづかいのしつけられかたに差があることは、今回のアンケート回答からも明らかになった。

「ことばづかいや話しかたについて、これまでだれかに注意を受けたことがあるか」という問いにたいして、「ある」と答えたのは女子学生95.8% (69名)、男子学生88.8% (79名) で、大多数が注意を受けた経験をもっているようだ。大学生になってからも半数ほど (女子学生38名、男子学生34名) が「注意を受けたことがある」という。

注意を受けた相手はつぎのとおりである。

《女子学生 (69名)》

①母 52(75.4) ②父27(39.1) ③両親以外の家族・親戚 19(27.5) ④アルバイト先の人 15(21.7) ⑤友人 15(21.7) ⑥教師 10(14.5) ⑦先輩7(10.1)
その他 2(2.9)

《男子学生 (79名)》

①母 48(60.8) ②教師 24(30.4) ③先輩 21(26.6) ④アルバイト先の人17(21.5) ⑤両親以外の家族・親戚 14(17.7) ⑥父 12(15.2) ⑦友人 9(11.4)
その他 5(6.3)

回答は複数、数字は人数 (%)

いちばんよく注意を受けるのは女子学生も男子学生も同じで「母」からである。これは、ことばのしつけにかぎらず、子どもの教育に父親があまりかわっていない現状のあらわれだろう。「母」に続く人物には異なりがあり、女子学生では「母」について「父」「両親以外の家族・親戚」であるが、男子学生は「教師」「先輩」が続く。女子学生と男子学生とをくらべると、女子学生は家庭で、男子学生は家庭の外で注意を受けることが多いといえよう。

どんな注意を受けたか、その内容にも差がみられる。10名以上が注意されたと回答した内容を以下にあげる。

《女子学生（69名）》

- ①乱暴な（下品な）ことばをつかわないように 35 (50.7)
- ②やさしい（上品な）話しかたをするように 25 (36.2)
- ③女らしいことばづかいをするように 22 (31.9)
- ④ていねいなことばづかいをするように 18 (26.1)
- ⑤あいさつをきちんとするように 18 (26.1)
- ⑥敬語をつかうように 18 (26.1)
- ⑦男のようなことばづかいをしないように 16 (23.2)
- ⑧人を傷つけるようなことばをつかわないように 16 (23.2)
- ⑨ことばづかいのまちがいを指摘された 16 (23.2)
- ⑩はきはきと話すように 13 (18.8)
- ⑪口答えをしないように 12 (17.4)

《男子学生（79名）》

- ①あいさつをきちんとするように 36 (45.6)
- ②敬語をつかうように 32 (40.5)
- ③はきはきと話すように 28 (35.4)
- ④人を傷つけるようなことばをつかわないように 19 (24.1)
- ⑤口答えをしないように 19 (24.1)
- ⑥乱暴な（下品な）ことばをつかわないように 18 (22.8)

⑦ことばづかいのまちがいを指摘された 16 (20.3)

⑧ていねいなことばづかいをするように 12 (15.2)

回答は複数、数字は人数 (%)

女子学生の半数は「乱暴な（下品な）ことば」を注意されている。また、「乱暴な（下品な）ことばをつかわないように」「やさしい（上品な）話しかたをするように」「ていねいなことばづかいをするように」「女らしいことばづかいをするように」「男のようなことばづかいをしないように」のいずれかを注意されたのは、60名で全体の8割にのぼる。一方、男子学生では「あいさつ」と「敬語」についての注意が多く、「男らしいことばづかいをするように」や「女のようなことばづかいをしないように」と注意された者はいない。また、「乱暴な（下品な）ことばをつかわないように」「ていねいなことばづかいをするように」のいずれかを注意されたのは27名で全体の3割である（「やさしい（上品な）話しかたをするように」はなし）。

男子学生のほうがぞんざいで乱暴な話しかたを多用しているはずだが、それについての注意は少ない。男子学生がことばづかいについて注意されるのは、外での対人関係におけるあいさつや敬語が中心であり、また、「男の子なのだから」「男にふさわしい」話しかたをするようにといったしつけがおこなわれることはない。しかし、女子学生にたいしてはやさしくていねいなことばづかいが強く要請され、「女の子なのだから」「女にふさわしい」話しかたをするように日ごろからしつけられているわけである。「女ことば／男ことば」規範にもとづくしつけが、「女ことば／男ことば」規範意識を育てているのはたしかであろう。

4 狭義「女ことば／男ことば」

4.1 狭義「女ことば／男ことば」のとらえかた

一方の性だけがつかうことば、すなわち絶対的性差のある言語形式を、狭義「女ことば／男ことば」と呼ぶことにする。大学生はこれをどうとらえて

いるのだろうか。

まず、「日本語には女だけがつかうことば、男だけがつかうことばがあると思うか」という問いにたいしては、ほとんどの学生（97%）が「あると思う」とこたえた。そこで、「あると思う」と回答した者にそれはどのようなことばや表現か、例をあげてもらった。これは、できるだけ具体的な文例でこたえるように指示した。複数の者によってあげられた例を整理するとつぎのようになる。【女】は「女だけがつかう形式」、【男】は「男だけがつかう形式」としてあげられたものである。例は回答の多かった順に並べた。

・人称代名詞など

【女】わたし（25）・うち（19）・あたし（15）・名前や愛称で自称（14）・あなた（12）・あんた（6）・あたい（3）・わたくし（2）

【男】おれ（81）・ぼく（52）・おまえ（31）・わし（25）・わい（5）・きみ（2）・てめえ（2）

・文末形式

【女】かしら（39）・だわ（31）・ね（20）・体言＋よ（19）・わ（19）・わよ（16）・だよね（9）・もん／だもん（8）・なの（8）・～して（依頼）（6）・でしょ（6）・わね（6）・ですわ（4）・よね（4）・ますわ（4）・だわよ（4）・～してよ（依頼）（4）・のよ（4）・じゃないの（3）・～してちょうだい（3）・でしょう（3）・なのね（3）・ですね（2）・ますの（2）・わよね（2）・だね（2）・やわ（2）・の（2）・の（疑問）（2）・のね（2）・やね（2）

【男】命令形（27）・だろ（19）・だぜ（18）・ぜ（13）・だ（13）・ぞ（12）・だろう（6）・やんけ（5）・命令形＋よ（5）・さ（4）・じゃ（4）・かい（4）・だな（3）・だぞ（3）・だよ（3）・か（2）・だい（2）・だよな（2）・な（2）

・感動詞類

【女】ねえ（9）・キャー（5）・イヤーン（3）・あら（3）・ウフフ（2）・カッ（2）・ワイイ（2）

【男】おい (11)・アホ (3)・おう (3)・オッス (3)・くそ (3)・こら (2)
・なあ (2)・うるせえ (2)・ちきしょう (2)・この野郎 (2)

・その他

【女】接頭辞「お」のつく語 (28)・ごはん (3)・おいしい (3)・たべる (2)

【男】おやじ (19)・おふくろ (18)・めし (5)・うまい (3)・食う (3)・
はら (3)・あねき (2)・けつ (2)・なんだと (2)

() 内は回答者数

ここでは注目できる点がふたつある。ひとつは、「わたし・あなた・でしょ・よね・の(疑問)・おいしい……」など狭義「女ことば／男ことば」とはいえないような形式がかなり含まれていることである。これらの多くは

【女】の項にあらわれる。そして、そのほとんどは、男専用形式とされるものがあってそれに対応する女専用形式がないとき、「女にふさわしい」とされる形式を「女だけがつかう」形式としてあげたものだといえる。たとえば、「男だけがつかう」形式として「ぼく」「ここにすわれ」「知ってるだろう」「どうしたんだい」「めしを食う」があげられたばあい、それにたいして「女だけがつかう」形式として「わたし」「ここにすわって」「知ってるでしょう」「どうしたの」「ごはんを食べる」があげられているわけである。

「男ことば」の輪郭が明確であるのにたいし、「女ことば」の輪郭はあいまいなものであるといえる。定義には矛盾するが、狭義「女ことば」は、「女だけがつかう」とされる形式だけではなく、「女にふさわしい」とされる形式までふくんだ範囲でとらえられているようだ。おおかたの意識としては、「男ことば」は「男だけがつかってよい」形式なのであり、「女ことば」は「女だけがつかう」形式と「女がつかうべき」形式なのである。

もう一点注意をひくのは、回答者は関西圏出身の学生が多数(女子学生の約8割、男子学生の約7割)であるにもかかわらず、関西方言があまりあげられないことである。中では自称詞をあげたものが多く「うち・わし・わい」がみられた。文末形式では「やね・やわ・やんけ・じゃ」をあげた者が少数いだけである。口頭での発表を求めると、とくに文末の諸形式にかんする

例はアクセント・イントネーションが共通語風になる。つまり、これらは自分たちがつかっていることばの内省による回答というよりは、「女ことば／男ことば」についての「知識」を答えているのである。

狭義「女ことば／男ことば」として回答された形式の多くは自分たちがつかうものではないのだが、だからといって、回答者にとって疎遠なものというわけでもない。テレビ、漫画、小説、歌詞などをとおして常に身近で耳にし目にしているものである。「日本語」の「女ことば／男ことば」というとき、まず頭に浮かぶのは、自分のつかっていることばではなく、これらのことばなのである。学生たちにこの点について意見を求めると、回答例は共通語（標準語）の「女ことば／男ことば」だという。

4.2 狭義「女ことば／男ことば」は「共通語」のものか

大学生の意見にみられるように、メディアでつかわれる、また、書きことばの「会話」の文体としてつかわれる「女ことば／男ことば」イコール共通語の「女ことば／男ことば」であり、それが日本語の「女ことば／男ことば」の標準なのだという意識は強い。そのため、自分たちがつかっている方言形式は標準からはずれた例外として考慮の対象とはされないことになる。たとえば、終助詞「わ」は関西方言では女も男もつかうが、それは例外で、本来の標準的なつかいかたでは女だけのことばというわけである。

このように共通語における狭義「女ことば／男ことば」というとらえかたがなされるのは、かくべつ不思議なことではない。げんに、辞書や文法書の記述もそうであるし、研究者が「女ことば／男ことば」を分析するさいの態度もこれと大差ない。だが、狭義「女ことば／男ことば」を共通語の枠組みのなかで論じるのは、問題があるのではないだろうか。

たとえば、「あたしもう帰るわ」「おれもう帰るぞ」といった典型的な「女ことば／男ことば」がつかわれるのは、くだけた場面で親しい相手にたいしてだろう。つまり、狭義「女ことば／男ことば」がつかわれるのは、公的な領域よりも私的な領域、フォーマルな場面よりもインフォーマルな場面にお

いてである。人は、場面（公的／私的、あらたまり度）や聞き手との関係（上下関係、親疎関係）などさまざまな条件を考慮して、いくつかの言語変種をつかいわけている。現代では、場面が公的であらたまったものになればなるほど、また聞き手が目上・疎の関係になればなるほど「共通語」的な話しかたをするのがふつうである。一方、日常的なくだけた場面や親しい人と話すときには地域のことば「方言」の要素が色濃くあらわれる。狭義「女ことば／男ことば」の出現域となる私的な領域・インフォーマルな場面の話しことばの基本は方言なのである。共通語をつかう場面には狭義「女ことば／男ことば」のあらわれる余地はあまりないといえる。

したがって、狭義「女ことば／男ことば」を論じるばあいには方言を土台にしなければならないことになる。各地域の方言の「女ことば／男ことば」のありようはけっして同じではない。にもかかわらず、たとえばつぎのような記述が一般的である。

現代語において、人称代名詞一人称で「ぼく・おれ・わし」は男性が使い、「あたし・あたくし」は女性が使う。普通、逆は使わない。また、終助詞「ぜ・ぞ・な」は男性が使い、「よ・ね・わ・かしら」は女性が使う。感動詞「ほう・おい・なあ」は男性が使い、「あら・まあ・ちょいと」は女性が使う。（中野1980）

これらの特徴は東京方言にはあてはまるのかもしれないが、それを「現代語」の特徴として一般化するのにはたして適当だろうか。たしかに東京方言は、共通語にもっとも近いものであるが、インフォーマルな場面でつかわれる形式まで、共通語としてあつかうことはできないだろう。たとえば、「ぼく」はともかく「おれ」や「わし」は、共通語の語彙としては認めにくいはずである。共通語を話す場面で「おれ」や「わし」が用いられるとは思えないからである。「おれ」や「わし」は方言のなかで位置づけられるべきものであり、これらが男専用の形式か女も男もつかう形式かは方言によって異なる（注2）。

東京方言にもとづくことばづかいがメディアのくだけた話しことばや書きことばの「会話」体のモデルとなっているのは事実である。したがって、影

響力も強く権威もある。だが、それを考慮にいれたとしても、やはり、そこにみられる狭義「女ことば／男ことば」形式は、かぎられた東京方言の話し手のものとして論じる態度が必要であろう。そうでなければ、絶対的性差のほとんどみられない方言もあるという日本語の「女ことば／男ことば」の多様性がみえてこない^(注3)。

東京方言は日本語のなかでもっとも絶対的性差の大きい方言だといえる。その東京方言の狭義「女ことば／男ことば」の特徴を共通語のもの、あるいは日本語一般のものとしてとらえることが、「女ことば／男ことば」規範を形成する大きな要因のひとつとなっているのではないだろうか。女だけがつかう、あるいは男だけがつかうとわりふられた形式がいくつもあることは、女と男のことばづかい・話しかたはちがうものなののだという意識と容易に結びつくからである。

5 おわりに

以上に述べたのはつぎのような内容である。

- ・大学生のいなく「女ことば／男ことば」についてのイメージからは、「女ことば／男ことば」規範が若い人々にも強く意識されていることがわかる。
- ・女子学生にはこの「女ことば／男ことば」規範にたいする疑問や反発がみられる。これは、この規範が女にとって抑圧的なものであるところからの当然の反応であろう。
- ・この規範意識を生む要因のひとつにことばのしつけの問題が考えられる。女の子か男の子かでことばづかいのしつけが異なることがたしかめられた。
- ・狭義「女ことば／男ことば」のつかわれる領域の話しことばの基本は方言であって、共通語ではない。各地域の方言の狭義「女ことば／男ことば」のありようはさまざまである。
- ・しかし、東京方言の狭義「女ことば／男ことば」がそのまま日本語一般のもの、共通語のものとしてとらえている。これは大学生も専門家も同じで

ある。方言のなかでも絶対的性差の大きい東京方言にもとづいて日本語の「女ことば／男ことば」が論じられることも、「女ことば／男ことば」規範を形成する要因のひとつとなっている。

「女ことば／男ことば」規範は、当然、現実の言語使用を規制する力をもっている。痴漢にあった女が「やめて」あるいは「やめてください」と依頼の形でしか声をあげられないとしたら、また、妻が夫を「あなた」と呼び夫が妻を「おまえ」と呼んでその呼びかたを疑わないとしたら、それはこの規範意識による。同時に、現実の言語使用は「女ことば／男ことば」規範に影響をあたえるだろう。たとえば、公的領域への女の進出とともに、性差のない話しかたがなされる場面がふえた。これは「女ことば／男ことば」規範が力をもたない場面がふえたということであり、相対的に「女ことば／男ことば」規範の力が弱まることになる。つまり、女と男の話しかたの現実と「女ことば／男ことば」規範とはたがいに影響しあうはずのものである。したがって、あらゆる場面で女と男の話しかたの性差が小さくなれば、「女ことば／男ことば」規範は弱くなっていくだろうし、その逆もいえる。最近、話しことばにおける性差がちぢまっているという指摘が多い。男よりも女の話しことばのほうが変化が大きいといわれるが、それは「女ことば／男ことば」規範からの解放を求める切実さが女のほうにより強いからだろう。

女の話しかたの変化という現実には「女ことば／男ことば」規範を徐々にかえていくはずであるが、ただ自然の変化にまかせるだけではなく、そもそも「女ことば／男ことば」規範自体を問うということがおこなわれなければならない。これまで日本は、ことばとジェンダー、ことばと性差別を問題にすることに消極的であった。最近では性差別的表現についてはかなり論議されるようになったが、「女ことば／男ことば」規範のばあいには「日本語の美点」とする見かたさえ受けいれられているほどで、なかなか問題視されにくいのが現状である。まず、「女ことば／男ことば」規範の性差別性についての論議をもっと深めていく必要があるだろう。それとともに、「女ことば／男ことば」規範を解体していく方法、そして、「女ことば／男ことば」規範から

の解放を運動として組織していく方法を求めることが今後の重要な課題となる。

(注1) アンケート調査(1998年10月実施)の調査対象は、以下のとおりである。

- ・大阪府立大学(経済学部・工学部) 18歳～24歳 女 11人 男 89人
- ・京都橘女子大学(文学部) 20歳～23歳 女 61人

(注2) たとえば、杉戸・尾崎1997は、山形の中学生が自称詞として「オイ・オレ」を女も男もふつうに使っていることを報告している。

(注3) 山口1991は、「ところで東海地方にあっても、愛知静岡長野の三県境の山村部は「無敬語」方言であると共に男女差もない方言である。(中略) この地方では子供同士はもちろん、一般に女性が男性に話しかけると、また、相手が先生であろうと、町長であろうと、外来の客であろうと区別なく、「ワリャどこ行くダー」「そうカー、こっちへ来い」で通る。初めて接する人はびっくりするけれど、慣れるとむしろ親しみやすいものである。」と述べ、また、名嘉真1991は「琉球方言の男女差は国語と比較して顕著ではなく、概して後者の相対的なものに見られる。恐らく、琉球では男女の地位差がもともと小さかったため、言葉の男女差も顕著にならなかったものと考えられる。」と述べている。

参考文献

- ・中野洋 1980:『国語学大辞典(「語彙の位相」の項)』 東京堂出版
- ・杉戸清樹・尾崎喜光 1997:「待遇表現の広がりとその意識—中高生の自称表現を中心に」『言語』Vol. 26—No. 6 大修館書店
- ・名嘉真三成 1991:「方言にあらわれた男女差—琉球方言」『国文学 解釈と鑑賞』722 至文堂
- ・山口幸洋 1991:「方言における男女差—東日本方言」『国文学 解釈と鑑賞』722 至文堂